（別紙4）　　平成　24　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	4371000565		
法人名	社会福祉法人　愛敬会		
事業所名	グループホーム　清泉		
所在地	熊本県菊池市七城町亀尾2484番地		
自己評価作成日	平成25年2月22日	評価結果市町村受理日	平成25年3月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人　あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13－12－205
訪問調査日	平成25年3月12日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

恵まれた自然環境、清潔な住居環境の下、医療との連携をとり、安全・安心な暮らしの提供に努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

毎日が自然と共生できる、そのような立地条件のホーム開設7年という経年による高齢化に、事故防止に向け環境整備や見守りの徹底等に取り組み、職員の自然体で笑顔でのケア姿勢は入居者の落ち着いた和やかな生活となって表れている。特養を中心とした法人施設の中にあり、母体と一体となった行事やクラブ活動参加、及び趣味の継続（地域の短歌会等）等地域住民との交流や社会参加は心身の活性化として生かされいる。また、医療機関との強固な連携は入居者･家族への安心感となって表れ、運営推進会議や家族会は情報発信、問題提起の場として機能させホーム運営に上手く取り入れている。今年度は職員の入れ替わりという節目にあり、報･連･相の徹底を部署目標として掲げ、コミニュケーションの強化に取り組んでおり、今後も馴染みの職員でのケアが継続されることを期待したい。

Ⅴ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
			2. 少しずつ増えている
		○	3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）		1. ほぼ全ての職員が
		○	2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

事業所名:グループホーム　清泉

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員の入職時や年度始めには、法人の理念とグループホームの理念を説明し、皆が共有できるようにしている。	毎年4月の全体会議の中で、理念についての講和により全職員が新たな気持ちで新年度をスタートさせている。今年度は職員が入れ替わり、理念の成り立ちから説明し、1年を振り返り部署目標として報･連･相の徹底を掲げている。職員は入居者一人ひとりの思いに寄り添いながら“ホッ”とする生活を目指し真摯にケアに取組んでおり、和やかな生活が繰り広げられている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	併設のデイの方やボランティアの方との交流、又、趣味の会の参加には、送迎も協力いただいている。	母体である特別養護老人ホームはあるものの、民家が少ないという立地面では地域との繋がりや高齢化という困難な状況のなか、保育園や幼稚園からの慰問や婦人会、傾聴ボランティアの訪問や公民館活動である短歌会に出たり、母体施設のクラブ活動(書道･生け花教室等)に出かけ、地域住民との交流に努めている。また、合同夏祭りや保育園との合同運動会では入居者の活躍の場(パン食い競争や玉入れ等)が設けられる等世代間を越えた交流に取組んでいる。また、職員は自主的に地域の清掃活動に取り組む等地域の一員として活動している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地元中学生の福祉体験や高校生の実習の受け入れ、地域の子どもたちとの交流など行っている。地域の方々への活動までは出来ていない。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所の入居状況や活動状況、事故の報告も毎回行っている。特に事故報告に関しては1つひとつ事例を報告し、原因と考察を上げ、今後の対応を説明、報告している。利用者家族の都合のよい時間を尋ね、開始時間を変更した。	定例化した運営推進会議は今年度は家族の参加しやすい時間帯に変更し、多くの資料や写真等により入居者の現状や活動報告、及び事故等を説明し、意見交換を行っている。また、運営推進会議の中で夜間想定の訓練を見てもらう等有意義な会議であり、家族には資料や会議をまとめ送付しており、議事録から透明性のある運営であることが確認された。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	法人の行事などには、参加いただいている。又、見守りネットワーク会議にも、事業所より参加し、連携をとっている。	法人の行事である夏祭りや敬老会への行政からの参加や、運営推進会議に市役所及び支所からの参加がありホームの現状を発信している。地域包括支援センター主催の見守りネットワークのメンバーとして会議に参加し、事故報告提出時や介護認定更新時の立ち会い等の情報交換等協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人全体の会議で、身体拘束に関する勉強会を実施し、具体的に実践している。	“身体拘束はあり得ない”と全員が認識しているが、法人全体での研修を行っており拘束の弊害を正しく認識している。特に安全の為につい出てしまう言葉での拘束等グレーゾーンについては意識を持って取り組み、外出傾向や帰宅願望等個々の状態を把握し、傾聴や寄り添いのケアを徹底し、付き添いのもと散歩に出かける等自由な生活を支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	法人内での勉強会やマニュアルを作り、虐待の防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度等の対象となる利用者がなく、今のところ、活用までには至っていない。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、退居時に契約に関する説明を時間をとって詳しく説明している。利用料金やリスク、重度化した時の対応など事業所として出来ること、出来ないことの説明を行い、同意を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会時や会議出席時に、何でも言ってもらえるような雰囲気づくりに努めている。	入居者には日常のコミュニケーションの中から要望等を引き出している。家族には訪問時に希望等が無いか聞き取りしケアサービスに反映させ、家族会のなかで事故･活動を報告し、意見交換やホームからの要望等も発信している。ホーム内外の苦情相談窓口を明示し、第三者委員を選定する等苦情処理体制が確立している。	家族会の中では職員への感謝の言葉が発せられており、職員のモチベーションとして生かされている。家族会の中に家族同士の話し合いの場を設ける等により、今後も家族の忌憚の無い意見や要望をホーム運営に反映されることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者がグループホーム会議への出席、又、個別面談にて個別の意見を聴く機会を設けている。	管理者参加による毎月のグループホーム会議時に職員の意見や要望を聴集し、ホーム長も日々職員とのコミニュケーションに努めている。今年度は自然な流れで業務を遂行したいと業務分担の廃止に向け1ヶ月間検証し、再度1ヶ月間行って確立させる等、合議により決定させる体制である。また、法人の職員会議参加や、職員は個人目標のもと自己評価により年1回自己を振り返り、ホーム長との面接が行われてる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を導入し、勤務状況を把握すると共に、目標を持って働けるシステム作りに取り組み中。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修の他、できるだけ外部研修にも参加する機会を設けている。 人材育成セミナー・グループホーム連絡会研修・スキルアップセミナー・グループホーム新人研修参加		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連合会主催の研修会に参加するなど、同業者と交流する機会を作って質の向上につなげている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	これまでの本人の生活状況を確認し、不安や心配を少しでも軽減できるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が困っていることに耳を傾け、意見や要望をゆっくり聞いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人が希望することを知り、法人内のサービスを利用することで、地域の方々との関わりを維持できるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	できることは手伝っていただくことで、介護される一方の立場にならないよう支援している。又、ご利用者の笑顔や声かけで職員がほっとさせられ元気づけられている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には、本人の状態を報告、相談すると共に、墓参り、法く事、病院受診など、本人を一緒に支えるために家族に協力していただくように努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔から利用している美容院や毎週自宅に帰り、仏壇参りなど、その人の生活習慣を大切にしている。	これまでの趣味や習い事等、出来得る限り出来ることは支援したいと短歌会（公民館活動）や書道･生け花（隣接のデイサービス）等を継続して支援し、馴染みの美容室利用、仏壇詣りに頻繁に自宅に帰る方、正月の外出･外泊、家族との電話や手紙のやり取り等馴染みの関係が途切れないよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が孤立しないよう、その人の性格に応じた対応を心がけている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人･家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約が終了しても、併設施設での行事などで、共に楽しむ機会がある。移り住む先の関係者に対し、本人の情報を伝え、環境の変化を最小限に食い止めるよう配慮している。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式シートの活用と、利用者、家族の希望･意向の把握に努めている。	アセスメントにより希望や意向を把握しており、元気に自宅で生活されていた様子からホームでも花の水やりや畑での野菜作りをプランに入れたり、日々の関わりの中で入居者の思いを引き出し、外出が好きとの情報により外食支援や「習字を貼って」との声に応え居室や廊下の壁面を利用し掲示する等思いを様々な形で叶えている。また、時には入居者の思いを家族に代弁し、外出等家族の協力により支援されている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式シートを用い、家族に記入していただいたり、聴き取り調査をすることで把握に努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎朝バイタルチェックを行い、心身状態の把握に努め、特に夕方には本人の一日の過ごし方を確認、記録している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の要望が反映できるよう、ケアカンファレンスには、本人や家族にも参加していただいている。又、ケアの変更が必要時は、随時ケアカンファレンスを行い介護計画書を見直している。	毎月全職員でのカンファレンスやケアマネジャーも3ヵ月毎にモニタリングを行い、実施状況を把握し達成度を見極め、転倒防止に向け歩行手段を家族と相談しプランに反映させる等現状に即したプランを作成している。また、介護認定更新に本人･家族の意向や要望を聞き取りしているが、家族からは「安心しています。助かっています。」の声が多いとのことであり、「これまで続けていたものを継続したい」との入居者の思いを反映させたプラン等が作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践･結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録に、食事･排泄･身体状況及び日々の暮らしの様子を記録し、いつでも職員が確認できるようにしており、朝、夕の申し送りや申し送りノートを用い情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の希望に応じ、併設のデイサービスに参加していただいたり、本人や家族の状況に応じて、病院への送迎など柔軟に対応した。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元の温泉に出かけたり、併設施設との合同行事やちぎり絵教室、地域の短歌会や忘年会への参加もされている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医の定期的な訪問診療や眼科や歯科に関しても訪問診療の協力をいただいている。基本的には家族同伴の受診であるが、不可能な時には職員が代行している。	本人・家族の希望のかかりつけ医を支援する事を入居時に伝え、現在は全員が母体協力医をかかりつけ医とされている。協力医とは2週間毎の往診の他変化時や日頃の相談等連携を図り、歯科・眼科の訪問診療や、専門医受診は基本家族対応としているが状況によってはホームからも同伴し情報提供している。バイタルチェックや様子観察で異常の早期発見や早めの受診により、大事に至らなかった事例等職員の観察力が発揮されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置し、介護職員と共に健康管理を行い、体調の変化や異常に気付き、医療との連携につなげている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された時には、本人の情報を医療機関に提供し、職員が見舞いを行っている。家族や医療機関とも、早期退院に向け情報交換をこまめに行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期については、指針と同意書を作り、家族にアンケートをとり、確認している。グループホームでの対応が困難な場合は、併設の特別養護老人ホームでの看取り介護につなげる場合もある。	重度化・終末期の指針を作成し、事前確認書で本人・家族の意向を確認している。重度化が見込まれたり場合には関係者で話し合い、医療への依存度によって医療機関や併設の特養との連携を図っている。看取り支援の経験もあり、ターミナルや看護の研修を実施しており、今後も母体医院の協力の下、ホームで出来る限りの支援に取り組んでいく意向である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人の全体研修やグループホーム会議でも、急変や事故発生時に対応できるよう勉強会を行っている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災マニュアルに沿って、定期的に特養、デイの協力を得ながら、避難訓練を実施している。又、運営推進会議終了後、出席者の方々に避難訓練の様子を見学して頂いた。	消防署立会いの総合訓練の他に自主訓練や防災教育を実施し、防災設備点検や自主点検で先ずは火を出さない事を意識付けている。又、運営推進会議後に夜間想定の訓練を実施し、委員に入居者の避難の様子を見て貰っている。自然災害を含めた防災マニュアルを整備し、手順や避難路を日頃から確認すると共に非常持ち出し品を準備している。	
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	馴れ合いの中で、本人の名前を呼ばないように、基本的に苗字を呼ぶように、心がけている。	トイレ誘導時の耳元での声かけやペースに合わせた手引き歩行等入居者目線での支援に努め、尊厳やプライバシーに配慮している。一人ひとりに合わせた呼称での呼びかけ、ノックや許可を得ての入室等が確認された。個人情報保護方針を掲示し、守秘義務の徹底に努めている。	職員の入れ替わりもあり新人を含め勉強会の実施や、入居者との馴染みや信頼関係の構築に向けた話し合い等が期待される。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の希望、関心、嗜好を見極め、要望に沿うように支援している。ホーム内外の活動についても、無理な押しつけはしない。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者個人の生活ペースを大切にしている。起床や就寝時間も特に決めていない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	出張の有料カットや行きつけの美容室へ出かけられ、カットやパーマ、染めなど本人の希望に沿った支援を心がけている。又、行事や外出時には、化粧やおしゃれを楽しんでもらえるよう、取り組んでいる。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	お米研ぎや野菜の切り刻みなど、出来ることを活かす場面の提供や、利用者の希望するおやつ作りや弁当を作り、東屋での昼食など、食べる楽しみの支援を行っている。	入居者の好みを取り入れ朝・夕の食事をホームで作り、昼食の副菜を法人で調理している。入居者が食に関る場面も多く得意の巻き寿司を巻いたり、おやつのたこ焼きや時には昼食にハンバーガーを一緒に作っている。又、畑で収穫した“ひともじ”を揃えたり干し柿作りや食材の下ごしらえ等を行いながら職員との会話も弾んでいる。苦手食材に対しての代替食や食べやすい形に切り分け、職員も一緒の食事を摂り食の進み具合を見守っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その人に応じた食事形態を把握し、食べ易いものを提供するよう努めている。又、利用者の好き嫌いを把握し、苦手なメニューに対しては、個別で対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは洗面所で行っていただいている。磨き直しが必要な方には、職員が対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表の活用、オムツやパット類、夜間のポータブルトイレの使用など、その人の状況に応じた見直しを行っている。	個々の排泄状態やパターンに合わせ見守りや誘導でトイレでの排泄を支援し、昼間は全員布パンツを使用し必要に応じパットを併用しており、パットの種類も個々に合わせたり昼夜で検討している。排泄時はプライバシーに配慮しドアの外で待ち、夜間使用のポータブルも昼間は別場所で保管している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給や体操（歩行訓練含）に心がけ、薬や座薬の使用で排便を促している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者の希望や体調に合わせ、お湯の温度や量に配慮している。又、脱衣所にエアコンが設置され、より快適な空間となった。	毎日準備を行い入居者の希望に応じており、個々に合わせた湯温設定や身体状況により短時間の半身浴で対応する等体調にも配慮し支援している。冬場は洗身前に湯ぶねに浸かり温まって貰い、安寿椅子や移動式の手すりの使用で安全な入浴に努めている。時には温泉での入浴を楽しんだり、入浴剤やゆず湯等を取り入れている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	和室での日向ぼっこや、食卓で新聞を読まれるなど、思い思いの休息の場所の提供や、夜間の排尿の声かけで汚染を防ぎ、安眠につなげている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬時には、確実に服薬が出来るように口腔内に投薬している。又、なるべく口腔内で溶けるタイプの薬剤への変更を主治医や薬剤師にお願いしている。薬剤の変更等があれば、副作用の有無など、症状の変化が発見できるよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	町の文化祭に出品し、作品の見学に出かけたり、他科受診の帰りにおやつを食べたり、郵便局で用を済ませるなどの支援を行った。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ドライブや季節ごとの外出（植木まつり、バラ祭り、ブドウ狩り、桜花見、菊まつり、温泉など）を楽しまれた。	入居者は法人施設との交流や行事に出かけたり敷地内の散歩コースを散策し、菜園の苗植え、ベランダでの外気浴や東屋での食事・お茶等を楽しんでいる。又、季節に合わせ花見やぶどう狩り・植木市等に出かけており、家族との外出を心待ちにされる方もおられ、帰省や外出・外泊等の協力が得られている。	今後も希望に応じ出かけたい時に対応できる等職員の機動力が発揮された外出支援の継続が期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分の財布の中から、お中元やお歳暮、切手代、衣服代などを支払う方もおられ、所持金を持つことで社会とのつながりを維持している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話では本人と家族が会話されたり、手紙や写真のやり取りで近況報告が出来るよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	光の刺激には、カーテンをこまめに開閉し、室温はエアコンで調整している。脱衣所にエアコンを設置することで、入浴が快適にできるようになった。又、気持ちの良い住居となるよう常に清潔に努めている。	広大な法人施設の中にあるホームは玄関前の鉢植えや室内にも入居者の活けた季節の花が置かれ、周りの樹木や草花にも四季を感じる事ができる。明るく開放的なリビングにはソファや足を伸ばせる畳の間を配し、職員の得意分野を活かした季節のタペストリーや居室入り口の手作りのれん等で暖かな雰囲気である。床暖や温湿度管理を行い、年数を重ねても小まめな掃除で清潔で居心地良い共有空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食卓やソファの配置を見直すことで、テレビを観たり、独りで新聞を読んだり、趣味の短歌作りに没頭できるような環境の整備に努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族が持ち込まれたカレンダーや家族との写真を飾る等、その方らしい居心地のよい空間作りを行っている。	洗面台やクローゼット・ベッド・タンスを備え付け、持ち込みの自由を説明している。椅子やテレビ・家族写真等が持ち込まれた居室は、入居者作品や家族から送られた帆立貝の殻を職員がリメイクした飾り物等思い出の品物を置き、入居者も一緒に清掃を行い自分の部屋として使用されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	転倒の危険性のある利用者のレベルに応じて、環境整備を検討、実践している。		